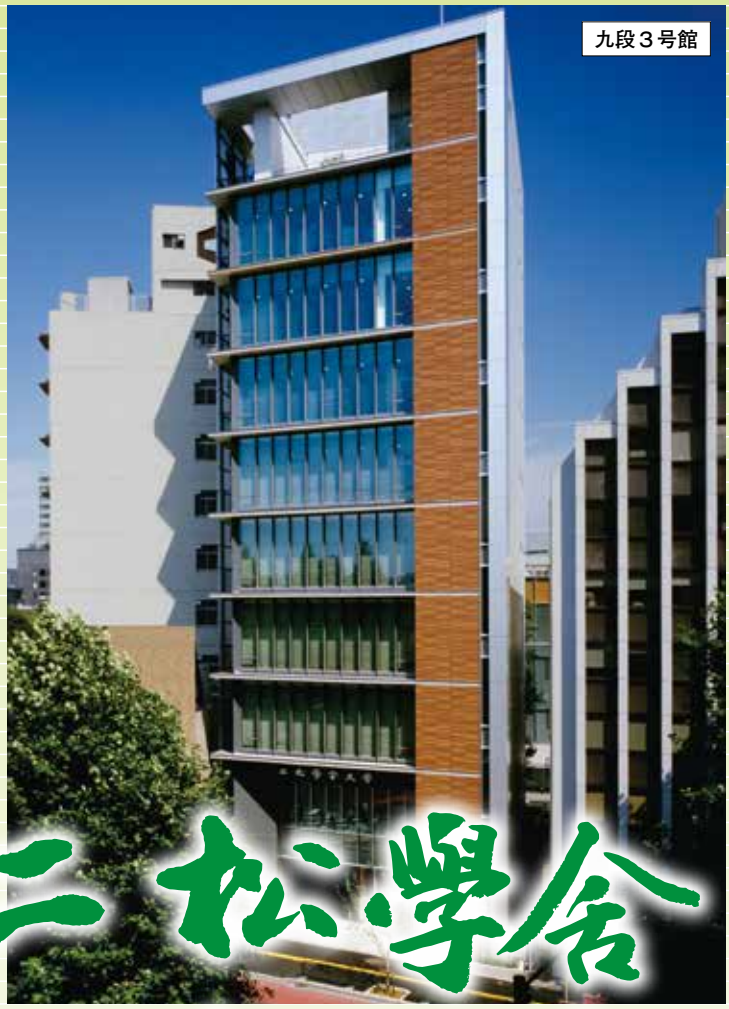


二松學舍 松苓会報

CONTENTS

P2 卒業される皆さまへ
P3 長野にある中洲先生が撰文された碑について
P4 松苓会支部長だより②－中国・四国支部特集－
P8 教壇を去られる先生方／松苓会支部情報
P10 卒業生だより
P11 第91期卒業生　同期会の代表幹事決定‼
P12 創縁祭2022を終えて
P13 サークル紹介
P14 吾輩推し言葉②
P15 現代学生気質／寄付者芳名
P16 附属高等学校野球部　4季連続甲子園出場／事務局だより／編集後記

No.69 2023年3月10日
二松學舍大学同窓会広報誌

145th anniversary since1877

91期生の皆さんへ

二松學舍松苓会
会長
廣田　克己

ご卒業おめでとうございます。「二松學舍松苓会」は皆さんを歓迎いたします。

皆さんは同窓会創立から91回目の卒業生です。１８７７（明治10）年漢学塾を開塾以来卒業生は約４万人と言われており、世界中の様々な分野で活躍しています。47都道府県に支部があり、４年前からは同期会がスタートしました。今日から皆さんは居住する都道府県の支部会員であり、91期同期会員でもあります。

さて、皆さんは大学生活にやっと慣れてこれからという時にコロナ禍に見舞われました。授業、サークル活動など言葉では表現できない大変な影響を受けたことでしょう。そんな困難を乗り越えて今日の日を迎えたのです。心からお祝いの拍手を送ります。

世界中を騒がせ、価値観を変え、社会を大きく変えたこの出来事は、分岐点として歴史に残る大事件です。

しかし、皆さんはこの歴史的な経験をこれからの人生の糧にしてください。失った３年と考えるのではなく、誰も経験したことのないものとして財産にしてください。この３年は、周囲の人にはなかなか理解してもらえない経験です。この思いを共有できるのは一緒に卒業する仲間だけです。進路は様々でも、大学で過ごした仲間との関係は自分の場所に戻った時の活力になるはずです。

さあ、いよいよ皆さんが自分で歩む生活が始まります。当分は大変でしょうが、時々は帰ってきてください。「松苓会」はいつでも皆さんを待っています。

どうぞ身体に気をつけて、逞しく生きてください。またお会いしましょう。

卒業生に贈る言葉

二松学舎大学
学長
江藤　茂博

社会人として生きていく君たちへ。君たちと過ごしたこの学校文化では不正は許されません。

君たちが育ったのは、いわば純粋な場所なのです。社会人になると少しばかりそれが許されるのではないかという、必要悪は避けられないという向きがあるかもしれません。そんなものを許してはなりません。

また、許されません。誰であれ、不正は許されないし、許すべきではないのです。確かに、正しいことが明確な時代ではないと思います。

しかし、正しいことがあいまいな時代であるからこそ、絶えず自ら正しくあることを検証しなければならない。不正を許さないとは、正しいことは何かを絶えず考えることなのです。

「論語」子路第十三に「子曰、其身正、不令而行。其身不正、雖令不従。」（その身正しければ令せずして行はる。其の身正しからざれば、令すと雖も従はれず。）とあるように、人の前に君たちが立つ時、命令がなくても正しく行われることを理想として欲しいものです。

そうであれば、司馬遷「史記」にある、「桃李不言下自成蹊」（桃李ものいわざれども下に自づから蹊を成す。）と、人は自然と集まり、道もできるのでしょう。

二松学舎大学もまた、学問の道を自ずと成す場所であり、君たち卒業生が歩む道も曇りのないものであることを疑いません。

君たちの正しき道を祝します。

長野にある中洲先生が撰文された碑について

長野県支部長
常任幹事　清水　登（42文）

『南相木村誌歴史編二近世』（南相木村誌歴史刊行会・平成二十九年）に、明治三十七年に建立とされる南洞中島翁碑（現所在地　南相木村中島区中島貞一氏宅）は、

「当初、同村内の御三甕《おみか》の滝の見える道上にあったものを現所在地に移設」

したと紹介されており、上部に枢密院副議長正二位勲一等伯爵東久世通禮篆額、本文は東宮侍講正五位勲四等三島毅が撰し、書は勅撰議員正四位勲三等金井之恭と刻している

君諱は茂、字は子久、茂八と稱す、一松堂は其の號、内堀氏、信濃國小縣郡依田村の人、父は茂市と稱し、母は關氏。萬延元年二月生まる、明治六年尾野山小學校に入り、既にして又松平學校及び長野師範學校上田支校に歴轉し、傍ら上野尚志に就き、漢籍を學び、最後東京に遊び、我が二松學舍に入りて、漢學を修むること凡そ十年、傍ら同人舍に遊び、英書を學ぶ。業成り、文部省中等教員の試業を受けて及第し、將に鄉に歸らんとす。余一松堂の扁額を書して之れを授く。蓋し我が學を分つと謂ふ也。遂に以て自から號とす、既に歸り塾を上田に開き、循誘學舍と曰ふ。贄を執る者凡そ六百人。三十三年七月十四日、病して終ふ、享年四十有一。坂口氏を娶り、二男二女を生む、長男を良民と曰ひ家を嗣ぐ、次を恒民と曰ひ、長女を松と曰ひ、次を竹と曰ふ。君天資温良、恭謙にして勉學人を兼ぬ、學術文章、我門の屈指と稱せらる。自から教授するに及び、循循として能く子弟を誘ふ、其の舍名の如し、子弟も亦之を敬愛し、追慕已まず。頃ろ胥に謀り、碑を建て以て其の恩に報いんとし、余に銘を速くと。銘に曰く。

一松尚榮え一松已に枯る、枯ると雖も種を播き萬株を繁殖す

大正三年一月　　從三位文學博士　三　島　毅　撰　並篆額

時齢八十五

學友東京女子高等師範學校講師岡田起作書

碑文は白文。参考に書き下しを付す。

とあります。同書には、中島嘉平治南洞（文化十三年《一八一六》―明治二十八年《一八九五》）は、幼いときから天性があり、学を好み、非凡な才能を発揮し、高度な学識を身に付け、江戸へ出ると朝川善庵の門に遊び、漢学を研究し、その道を究めようと努め、また国史にも関心を持ち、上小田切（現佐久市）の儒学者である鷹野翁とともに南佐久の二学傑と呼ばれたとあります。

また『信濃碑文目録』（市川本太郎・市川文庫・昭和四〇年）に、明治四十一年建立とされる嘯古堂北村翁碑（所在地・長野市妻科神社）が紹介されており、三島毅撰文、日下部東作書とあります。『信州人物誌』（信州人物誌刊行会・昭和四十八年）には、北村方義（天保五年《一八三四》―明治三十四年《一九〇一》）は、上高井郡須坂町（現須坂市）に生まれ、十九歳のとき、江戸に出て、亀田綾瀬・鶯谷父子に学び、文久二年《一八六二》に須坂藩の藩学立成館の教授に就任し、藩主堀直虎の信任を得、その後、長野県に出仕し史誌の編纂等に携わり、公職を辞した後は、妻科に住し、子弟の教育にあたるなど、地元文化の発展に尽くしたとあります。

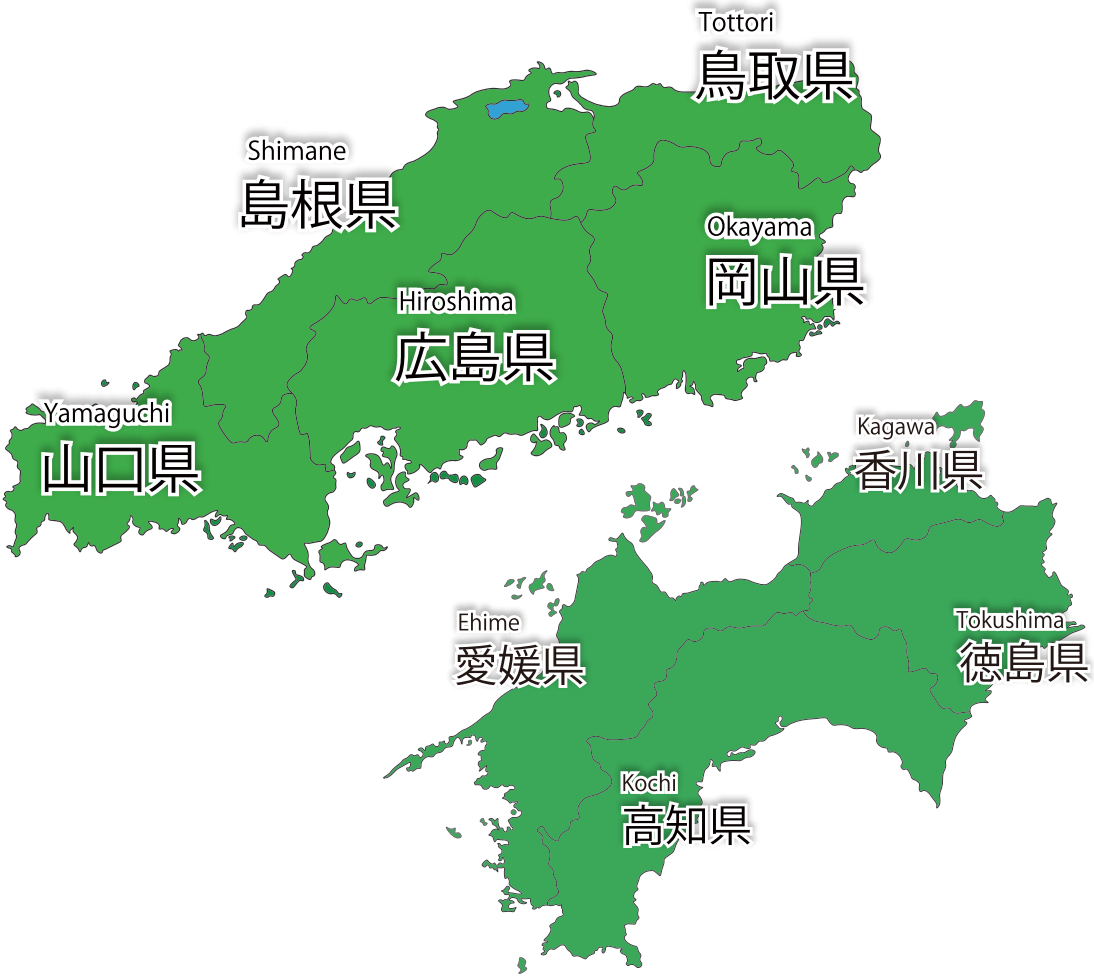
そして『小県郡碑文集』（藤澤倉之助・昭和三年）に、大正三年建立とされる一松堂内堀君報恩碑（現所在地　上田市上田城址公園　当初、上田市少学南校北側内堀良民氏宅にあったものを現所在地に移設）が紹介されており、同碑には、撰並篆額三島毅、書岡田起作とあります。『上田市史下巻』（信濃毎日新聞社・昭和四十九年）には、内堀茂八（万延元年《一八六〇》―明治三十三年《一九〇〇》）は、明治六年に尾野山小学校入学、上田松平学校及び長野県師範学校上田支校に転じ、傍ら上野尚志に就いて漢籍を学び、その後、東京に遊び、三島中洲の塾に入り、漢学を修め、傍ら同人社にて英学を習い、文部省中等教員の試業に合格し、郷里に帰ろうとしたところ、師三島中洲より我が校を分かつ意味をもって「一松堂」と書いた扁額を贈られたことを機に自分の号とし、上田に帰った後、塾を開き、循々として能く子弟を誘う意で「循誘学舎」と称したとあります。

上田城址公園内に建つ
一松堂内堀君報恩碑

新連載

松苓会支部長だより②

―中国・四国支部特集―



鳥取県支部

私の宝物

支部長　小谷章公（38文）

私が二松で学んでから早や52年が経過したのだが、半世紀経過した今でも二松での学生生活で得た数々の絆が大切な私の宝物となっている。そのひとつは、神田古書街や靖国神社、国立劇場、国会図書館等の学ぶ上での環境の良さであろうか。学舎での学びはもちろんであるが、地方から上京した者にとってこの上ない学びの立地環境にあり、二松で学んだことが今でも大きな自信になっている。

喜寿を迎える年となり、断捨離ではないが書籍等、身辺整理をしていて書物を手にする時、神田の古書店で買入した本、国立劇場で観劇した歌舞伎のパンフレット、国会図書館で下調べした時のノート等々を手にすると、50年前の二松での学生生活が、懐かしく思い出がよみがえってくる。近年、九段上に学舎が統合拡充されているようであるが、学生諸君にとっては、この上ない学習環境で学ぶことが出来、誠に喜ばしいことだと感じている。

いまひとつは、二松で共に学んだ友との強い絆が今でもつながっていることである。

お互いに地元に帰り、教職に就いた者が多い。千葉のK君、沖縄のK君、秋田のI君、石川のKさん、栃木のA君など、今でも親しく状況のやり取りを重ねているのも二松での宝物であろうか。

支部長とは名ばかりで、心苦しい限りであるが、次の有望な方にバドンをつなぎ、活性化を進めて役目を終えたいと考える今日この頃である。

二松の益々の発展を祈念して結びといたします。

靖國神社から３号館を望む

岡山県支部

岡山県と三島中洲

支部長　永瀬　清（39文）

二松學舎大学の創設者三島中洲は、備中国窪屋郡中島村（現岡山県倉敷市）に生まれ、14歳で備中松山藩（現岡山県高梁市）の儒学者山田方谷に師事……という創設者の経歴はさておき、二松學舎と岡山県の関連は年々衰退しているように感じるのは私だけなのでしょうか。

倉敷には三島中洲生家跡碑があり、地元の町内会は生家跡碑周辺を定期的に清掃して郷土の偉人を大切に見守っています。また観光地倉敷美観地区には二松學舎大学の資料館もあります。資料館は平成の初め頃に倉敷市と二松學舎大学との連携協定という流れにより開設されたものです。

三島中洲生家跡碑
左側が永瀬清氏

「あれから○○年！」というどこかで聞いたことのあるフレーズを入れてみると、今の岡山と二松學舎との乖離がおわかりになるだろうと思います。

岡山県在住者の願望は、郷土の偉人が二松學舎という大学を創設した事実を県内に浸透させることにあります。そのための支部活動として「中洲ツアー」の構想がありましたが、流行病により企画倒れになってしまったことが残念です。しかし支部として今後社会情勢が許せば必ず実現したい企画でもあります。

「二松學舎は倉敷が生んだ偉大な三島中洲が創った大学だ！」と声高に言う日を夢見ているのです……。

広島県支部

私の二松學舎今昔物語

支部長　村山慶一郎（47文）

九段にあった、フェアモントホテルをチェックアウトし、入学式に向かったのが48年前。入学のきっかけは、高校の恩師二人が二松學舎のOBだったから。父が学んだ東京六大学を諦め、〝中国文学〟を学んだ。ただ、地元では、校名も読めず、知らずで、説明の文章まで作成した。住み家は、下落合の東京学生会館。東大から、早慶など東京中の大学生約400名の国立の学生寮で、寮費一か月8000円。灘高のジャージを来た東大生に、漢文を教えたのは、良き思い出。恩師の勧めで入った語文研では、語劇〝阿Q正伝〟の悪役の親分をさせて頂いたが、サラリーマン的要素が必須と悟り、退部。軟式野球愛好会を立ち上げた。現在も、部として活躍していて嬉しい。卒業後は現JFE物流を皮切りに、全日空のホテル、地元広島のTBS系の放送局等で、営業や企画を中心に頑張った。放送局を定年後も、2社の企業の役員をさせて頂いた。その地元広島で、今年「G7広島サミット」が開催予定だ。〝平和〟だけでなく、お好み焼きや汁なし担々麺、あなご弁当など広島グルメが世界に向けて紹介される。世界遺産の宮島や原爆ドームの認知度は更に上がる。情報のなせる業だ。

それを二松學舎に置き換えると、広島エリアの認知度は〝超〟低い。誠也選手がカープに来て少し上がった位。

今後、広島出身の多くの学生が九段坂を闊歩出来るよう、「情報発信」と「広報」に力を入れて行きたい。

※今回、都合により島根県の支部長の原稿の記載はございません。
次号以降に掲載する予定です。
ご了承ください。

山口県支部

学生時代の思い出

支部長　俵田賢嗣（40文）

私が入学したのは昭和四十三年四月（一九六八年）で、当時は学生運動のピークだったと記憶しております。その四年間の大学生活を送る中で、大変大きな事件が二つ起こりました。

一つは、一九七〇年十一月二十五日の三島事件です。その時、友人と学食におり、テレビの速報で事件を知り、食事もそこそこに慌てて友人と市ヶ谷駅に直行しました。当時はまだ市ヶ谷の自衛隊の建物を見ることができましたので、駅横の土手から暫く様子を伺っていましたが、すぐに新宿駅に向かい（午後の授業は自主休校）構内のキヨスクで夕刊が出るのを待ち、数社の夕刊を購入して下宿へ一目散、部屋に全紙を広げてスクープしている新聞社を確認しました。なぜなら、当時私は将来の就職先として新聞社か出版社を希望していたからです。

もう一つの事件は、一九七二年二月十九日に起きた浅間山荘事件です。卒業の年で就職も決まり、帰省の準備をしている最中に起きた日本中を震撼させた事件です。一日中テレビに釘付けになったのを記憶しております。

とは言え、当時のわたくしはノンポリと呼ばれる部類の人間でしたから警察のお世話になることはありませんでしたが、今、こうして半世紀が過ぎてみると、私の大学四年間は激動の時代であったと感じております。

最後になりますが、今後大学の益々のご発展をお祈りいたします。

徳島県支部

出会いとご縁に支えられて

支部長　大倉明子（47文）

徳島県支部では、大学の地区別父母懇談会の開催日に合わせて支部総会を行ってきましたが、近年進学者の減少が続き、長らく総会ができていません。

しかし会員同士の個人的な交流はそれぞれに応じた形で続いています。特に先輩方は、二松學舎で学んだ精神や学識に自信と誇りをお持ちで「二松學舎卒業に恥じない仕事を」と、電話や手紙で、時には職場においでくださり直々にご指導くださいました。

支部活動を通して先輩方との出会いは、心の支えとなり、私の人生の財産となっています。

支部総会で最も多くの卒業生が集ったのは、佐古純一郎先生が学長になられ、故郷徳島で講演会を開催した時でした。県内各地から先生にゆかりのある方々や出身地神山町民の方が大勢会場に詰めかけ、地元の温もりに包まれた和やかな講演会でした。

佐古ゼミでお世話になった私は、佐古先生のお話が聴けることを心待ちにしていました。にこやかな表情で大学の講義と同じようにお話しされたお姿を忘れることはできません。

書道は堀江ゼミで学び、書道部にも所属していました。

それからのご縁で四十年以上経った今も堀江知彦先生のご子息、お孫さんとのお付き合いも続いております。

多くの出会い、ご縁をくださった二松學舎に感謝しながら、これからも大切にしていきたいと思っています。

香川県支部

平和な世界を願う

支部長　大西邦美（40文）

54年前、当時の四国香川からみた東京は今のようにネット情報はなく、私にとって未知の世界でした。親里を離れた4年間の学生生活は、不安がよぎりながらも、全てが新鮮で好奇心に溢れ、多くの人との交流を通して見聞を広めることが出来、そして真正面から本物の学問に向き合えたのです。

そういう意味で、この4年間がこれから生きていく上での指針となったように思いま

す。

地元に帰省し、25歳で文学とは無縁な政治の世界に入り、悪戦苦闘しながらの36年間の議員生活を送ることが出来ました。今懸念されること、ロシアプーチンの誤った政治行動に端を発し、軍事・経済など世界に緊張と混乱をもたらしてしまったことです。我が国も防衛費の増強と物価高に歯止めがかからなくなってきています。とにもかくにも、平和な世界を一日も早く構築していかなければならないと、ただただ願うばかりです。

愛媛県支部

学生時代の思い出

支部長　上田善達（38文）

私が二松學舎に入学したのは、昭和41年、20歳であった。高校時代に肺結核で療養生活を送っていたため、同級生より2年遅れの入学であった。二松出身の大野武（専13回卒）先生に兄たちが教わっていた縁であった。

入学と同時に松吟会に入部。松吟会は全国学生詩吟連盟と緑村吟詠会学生部の二つの連盟に加盟していた。それぞれの組織で先輩方が本部役員となり、活躍されていた。

その影響もあり、サークル活動に熱中した。

地方出身の私にとって、連盟を通しての他の大学との交流は新鮮で刺激的であった。特に流派の師範が大東文化大学の付属高校の校長をされていた関係で、先輩方に連れられて、大東文化大の板橋にはよく通った。また、一年次後半から学生部の役員となり、活動した。吟詠大会の思い出としては、昭和43年12月に日本武道館で開催された「財団結成全国吟剣詩舞道大会」など数多くあり、これらの活動や経験は、教員としての資質向上に役立ち、人間的にも成長させてもらったと思う。

当時の仲間たちとの会も平成3年から8回催してきたが、その開催もコロナ禍のため、延期を余儀なくされている。一日も早くコロナが終息し、平穏な日々が営まれるよう切に願うとともに、皆様のご健勝を祈ります。

高知県支部

学生時代の雑感

支部長　足達　昇（47文）

令和4年度から、戸田浩前支部長の後任として支部長を務めることになりました。何卒よろしくお願いいたします。

実は、私はもともと高知県人ではありません。生まれ育ったのは、神奈川県の横浜市です。大学卒業後、父親の郷里である高知へ移り住み、爾来40年近くが経ちました。

二松學舎大学に入学して2年間は、完成まもない柏キャンパスに通いました。横浜の自宅からは乗り換え時間も含めると片道2時間半以上かかるため、柏市内のアパートで独り暮らしを始めました。

生活費を抑えるため、風呂なしの部屋を借り自炊をしました。3回生からは九段キャンパスとなり、横浜から通学しました。往復で約3時間半の道のりです。

体育連合会の部に所属していたこともあり、大学時代は何かと時間に余裕がなかったという印象があります。確かに、前半の2年は生活していくための時間に、後半の2年は通学のための時間に多く費やされていたわけですから。

しかし、時間に追われながらも、退屈だったという記憶は、大学時代にはほとんどありません。

そして、長年経過した現在でも、何かと慌ただしい生活が続いています。今となっては、このような暮らし方が自分の生き方であり、幸せなのではないかと感じるようになりました。まもなくやってくる、定年退職後の時間が有り余る生活を想像すると、かえって不安がよぎります。

教壇を去られる先生方

私の宝物

国際政治経済学部教授

河原田有一

本学に在職して31年、まさに、光陰矢の如しという陳腐だが、その表現に凝縮されている。１９９１年の就任以来、柏に14年間、三番町に17年間という教職の場において数々の経験と人間として力をつけさせていただいた。

大学教員の仕事は単に研究するだけではなく学生の教育面の指導及び就職の指導という重要な側面があります。

学生にとって就職はまさに人生の別れ道です。この局面において、私は大いに貢献できたのではないかと思っています。

多くの卒業生は最初の就職を契機により良い会社へと転職していき、より充実した仕事に専念していきます。このような機会にめぐり合わせ、各自の人生を切り開かせていただけたことは私にとって教員冥利に尽きると自負できます。

思えば、定年という人生の最大の節目において、次に来る最後の節目の準備期間として、邯鄲の夢に思いふける中、これまでの私の教員人生の至らなかった点を数々手助けいただいた、同僚、職員、教え子達に感謝の念を表したいと思います。

教室の風景

国際政治経済学部教授

髙野和基

１９９７年４月に沼南校舎（柏キャンパス）の教室で二松學舍大学の学生さんたちと出会ってから25年の歳月が流れました。私は、国際政治経済学部で政治学（１年生）、現代日本政治分析（後の日本政治論）、地方自治論（時期は限定）などの講義を担当してきました。

定年退職にあたって楽しく思い起こされるシーンは、大教室での講義です。

学部の九段キャンパスへの全面移転までは、沼南１号館501教室（講堂？）が主な「舞台」でした。がたつく長机と４人掛けのベンチ。大勢の学生さんのエネルギーに負けるものかとガンバリ過ぎて・・・「声がでかすぎる」という苦言ももらいました。九段の整備された教室では、学生さんの様子が手に取るように伝わってきました。「あれっ、授業内容が伝わっていないのかな」と反省したり、思わず怒鳴ったり、でした。学生さんをはじめ、これまで私の「教室の風景」を支えてくださったたくさんの皆さまに心から感謝を申し上げます。

25年間、汗をかきながら多くの学生さんと教室で出会い続けることのできたこと、幸せでした。卒業生の皆さまのご多幸をお祈り申し上げます。

松苓会支部情報

千葉県支部

「成田の書と文芸に親しむ」文学散歩を実施して

支部事務局　土屋　誠（50文）

秋日和。その日は、十三代目市川團十郎の襲名奉告の日とも重なり、朝から参道は明るい空気につつまれていた。

千葉県支部としては、市川市で開催して以来の文学散歩。しかも「ウィズコロナ」へと世の中が移行する中での開催となった。

10月22日土曜日午後、成田山書道美術館には二十余名の参加をいただき、本多和宏先生（千葉県総合教育センター研究指導主事）から成田山公園内の碑文の揮毫者や歴史背景につ

説明する山崎主任学芸員

いて説明をいただいた。
　また、館内では、主任学芸員の山崎さんに依頼した二松學舍に縁ある人の書について、丁寧な説明をうかがった。
　比田井天来や渋沢栄一、吉田茂など貴重な書がじっくりと参観できた。また、私は公園内の高濱虚子の句碑「凄かりし月の団蔵七代目」についての鑑賞と経緯などをお話しした。
　支部主催行事として本部の廣田会長、家永副会長や他支部長にお運びいただき感謝している。そしてまた、現役学生の参加を得たことは望外の喜びであった。
　来年度は、地域に根ざし、開かれた行事として、更に努力して行きたい。

東京都支部

支部総会・講演会開催

支部長　矢澤喜成（50文）

　令和4年8月27日（土）於二松學舍大学九段一号館コロナ禍による2年の延期を経、感染対策を施して開催された総会では、役員選出・活動報告・活動案・会計・監査報告・予算案と、滞りなく議事が進行した。
　「詩吟と朗読の会」講師は詩吟を家永修松苓会副会長に、朗読を津田千代子朗読家に依頼。
　元松吟会の家永先生は、渡邊緑村流の吟詠で、自ら墨書された三島中洲・山田済斎・濱青洲の漢詩、そして矢澤作の「七賢」の七絶等を、軽妙な語りを交えて、音吐朗々と吟じられた。
　津田千代子さんによる浅田次郎作『雛の花』の朗読では、その溢れる臨場感に、会場全体が小説の世界に引き込まれていた。

東京支部総会　中央が家永修氏と津田千代子氏

〈参加者〉（敬称略）
廣田克己（松苓会会長38文）
渡辺和則（元学長）
畠山幸治（37文）・中原和子（39文）
山田貴美子（39文）・金井　康（41文）
佐藤　修（41文）・浅野進太（42文）
星野優子（42文）・積田辰也（43文）
家永　修（44文）・大山由美子（47文）
髙柳幸雄（49文）・矢澤喜成（50文）
片山聖英（50文）・大渕俊明（50文）
高橋映子（53文）・中原敬二（62文）
桑原玲子（63文）・渡辺大雄（65文）
荒屋陽子（85文）・原田佐知子（準会員）

左が廣田会長。中央と右が、朗読家の千明素子氏と萩野安美氏

長野県支部

長野県支部総会報告

幹事　石川麻貴（71文）

　令和3年度長野県支部総会が、去る令和4年7月23日（土）にホテル信濃路（長野市中御所岡田町）において開催されました。
　本年も新型コロナウィルス感染症拡大に伴い、大学、松苓会等のご来賓の出席はお願いせず、長野県内の会員7名での開催となりました。
　総会では令和3年度活動報告、会計報告、監査報告、さらに令和4年度予算案、役員改選が満場一致で承認されました。
　新型コロナウィルス感染症による影響は、支部総会の縮小、文学散歩の中止などにおよび、なかなかコロナ禍前には戻れない現状が続いております。
　しかしながら顧問の関先生（文35回）が始められた文学散歩は、今や長野県支部以外でも広がっているとのことです。清水支部長（文42回）からも、文学散歩の意義や、県

を超えて交流できる素晴らしさもあることから、ぜひ新しい参加者も掘り起こしながら活動を継続したいという熱い思いを伺いました。会員同士が気兼ねなく交流を深められる日を心待ちにしております。

総会後の懇親会は開催せず、わずかな時間の支部総会となりましたが、年に一度の大切な時間であることに変わりはありませんでした。

一日も早く落ち着いた日常が戻り、賑やかな懇親会が開催できることを願いつつ、閉会しました。

〈参加者〉（敬称略）

関　保典（文35）・清水　登（文42）
大工原明人（文42）・上平　徳男（文51）
江村　春彦（文57）・北村　里美（文57）
石川　麻貴（文71）

卒業生だより

退職後の楽しみ

鈴木俊美（50文）

本学を卒業後、埼玉県北部の公立中学校に国語科教員として39年間勤務し、63歳で完全退職をしました。今年で65歳となります。

退職後は、書道の〝師範〟を目指し「全書芸」という競書に毎月作品を出しています。大学時代は一時書道部に在籍していましたが、周りの人たちの作品に圧倒され途中で書道部から離れてしまった落ちこぼれです。今は時々競書の写真版に作品が掲載されるのを励みに、漢字、かな、細字と精を出しています。

また、月2回のコーラスの練習も心を癒します。お腹から声を出すのは健康によく、ストレス解消にもなっています。昨年はコロナ禍で無観客ながら2回の発表の場を持ちました。色鮮やかな赤いドレスで「大地讃頌」「見上げてごらん夜の星を」など数曲を披露しました。この4月にフファミリーコンサートの計画があり、今はその発表に向け練習をしています。

また、娘がこの千代田区に在住し、区の職員としてお世話になっているので、孫娘二人の面倒を見に時々上京しています。その際には孫たちと本学前を散歩したり、靖国神社を訪れたりと大学当時を懐かしんでいます。これからも時々は本学前を歩き、本学の発展を孫とともに見ていきたいと思います。

感　謝

川向和弘（52文）

二松良いとこ
誰云うた
靖國神社のすぐ裏に
粋な学生さんがいると云う
一度は拝んでみたいもの
（「松吟會小唄より」）

四十年以上前のことである。青雲の志をもって花のお江戸に出たはずが、新入生勧誘期間に神奈川大学の女性先輩に声をかけられて入部したのが「松吟會」という（当時大学最古の）吟詠部であった。

入部といっても、当初は正部員として認められず、修業のような毎日が夏合宿まで続いた。そして最終日、正部員の証のバッヂが授与された。それを学生服の襟に挿した時の気持ちは、今も忘れられない。以来現在までその気持ちを胸に生活してきた（良くも悪くも…）。

当時（一九八〇年代）でも学生服を着ている大学生はほとんどいない中、学生服に雪駄を履いて（朴歯はうるさい為）全国学生詩吟連盟の活動に勤しんだ。そして各地で（まさしく）高歌放吟した―東京駅のプラットホームや夜の京都などなど。

四年間の大学生活で、この詩に出会うこともできた。

對酒　白樂天

蝸牛角上爭何事
石火光中寄此身
隨富隨貧且歡樂
不開口笑是癡人

近況について

高見香代子（56文）

卒業して35年、現在私は書写教室を開いています。コロナ禍の中、決して順風ではありませんが、6歳から75歳までの幅広い年齢の生徒さんが来てくれています。

曲がりなりにもこうして「書」に関する仕事ができているのも多くの方々に助けていただいているからですが、大きな要因として二つあると私は強く思っています。

一つは二松學舍大学附属柏高等学校で書道非常勤講師として勤めた経験。

伝わるように話をすること、書き示すことの大切さを学びました。

もう一つは大学時代から現在も難波清邱先生を師と仰ぎ書峯塾の一員として活動していること。

知識、技術だけでなく、社会の中で生きていく術、学びに終わりはなく学び続けることを忘れてはならないことを知りました。

今の立場になって初めてこれらはすべて、私の土台となっていると気が付きました。

折しもこの3月、「書峯創立48周年記念展・米寿記念 難波清邱 書・蘭展」を開催します。コロナ禍で2年開催できませんでしたので、今回は必ず成功させたいと祈っております。

これも私の土台とすべく。

二松はいいぞ

熊谷俊介（78政）

『二松はいいぞ』。卒業から10年以上経った今でも言い続けている言葉です。

これからも私は何かある度に言い続けるでしょう。

二松學舍で学んだこと、友人や先生との出会い。それら全てが、今の私の一部です。

二松學舍大学国際政治経済学部国際政治経済学科卒業。

この文字面がかっこいい。漢字が24字も続くのです。

勿論見た目だけではない。

私は在学時に選択科目でフランスとロシアの語学と社会事情を、ゼミではドイツを先行していました。卒業後は一度自身の目で世界を見たいと思い、約1年かけてアジア3か国と欧州8か国を回り、様々な貴重な体験をしました。

その後、父の経営する不動産会社に勤め、現在は主に外国籍や生活保護、高齢者等のお客様を専門とした営業をしており、今後はオンラインによる契約や内見等の社内のDX化を進めていく予定です。

忙しくもそれなりに充実した日々を過ごしつつ、休日は二松の卒業生が監督をしている草野球を続けています。

今年は野球のWBCがあります。代表に選出された鈴木誠也選手は皆様もご存じの通り二松學舍附属高校の出身です。二松學舍が世界の舞台で輝くのを楽しみにしています。

「そういや押野先生元気かな。同期の仲間も元気かな。」

―ふと、先生や仲間たちのことが思い浮かぶのです。久しぶりに会って一杯飲みながら、「二松はいいぞ」と語り合いたいですね。

第91期卒業生 同期会の代表幹事決定!!

令和5年2月10日（金）午後2時に一号館401教室に集合した91期生は25名。大貫龍之介君（伊藤普太郎ゼミ）の立候補があり参加学生の承認を得て代表幹事に決定した。

司会は教務課の中原敬二氏（62期）が担当。松苓会の廣田克己会長（38期）の挨拶。小林幹事長（38期）から会運営要領案の提示。持田副会長（40期）から卒業後の同期の言葉から心の栄養を得たことを吐露。

廣田会長から始まる同期会の説明は伝統的に繋がる縦糸となる松苓会と時間を共有した横糸となる同期会の重要性を訴え、学生に一枚岩の心の支柱を示すものであった。

前列左から５人目：大貫龍太郎代表幹事

創縁祭2022を終えて

学園祭実行委員会　委員長
国文学科3年　水口愛子

11月2日（水）、3日（木）に「創縁祭2022」を開催いたしました。今回の創縁祭テーマは「合縁奇縁」ということで、不思議なめぐり合わせが起こり、たくさんの方と出会えるようにという思いで開催に向けて誠心誠意取り組んでまいりました。2年ぶりに全面対面で開催することができ、学園祭実行委員会役員一同嬉しく思います。

「創縁祭2022」では各団体やゼミナールの発表を来場者の皆様に直接見ていただくことができました。参加団体の皆様からは久しぶりに活気のある創縁祭を開催できてとても嬉しかった、自分の発表を来場者の方に見てもらえることがこんなにも嬉しいことなんだと改めて感じた等、対面で開催することができた嬉しさや、多くの来場者が足を運んでくださったことへの感謝のお声をいただきました。

来場者の皆様からは、二松學舍らしい発表を直接見ることができて嬉しい、様々な企画があり、老若男女が楽しめた、若者たちの元気なエネルギーをもらえた等の暖かいお言葉をいただきました。

このようなお言葉をいただくことができ、役員一同、大変嬉しく思っております。参加してくださった団体の皆様方や、足を運んでくださった来場者の皆様方に感謝申し上げます。

新型コロナウイルスの感染状況により一喜一憂する中、どうにか全面対面で開催できないか、役員一同で何度も会議を重ね、大学ともほぼ毎日のように話し合って、検討していきました。対面開催の許可がでたときは役員一同安堵の胸をなでおろし、そして2年ぶりということに緊張しておりました。

私は委員長として先輩が作り上げてきた創縁祭を、新型コロナウイルスという制限がある中で、どう取り戻していくかをずっと悩んでおりました。

しかし、同期や後輩と話し合いを重ねるにつれて、先輩方が作ってきた創縁祭を取り戻すのではなく、新型コロナウイルスの制限がかかっている中で、新しい創縁祭を私たちで作り上げていくべきではないのだろうかと考え始めました。

今まで作り上げたものを参考にしつつ、私たちで新しい形の創縁祭を作る姿。後輩にその姿を見せることで、自分たちが後輩を引っ張る立場になったときにも、同じように自分たちだけの創縁祭を作り上げることができるのではないだろうかと考えました。今では、その後輩も学生会執行委員会、そして学園祭実行委員会を任せられるような頼もしい存在となりました。

2年間、学生会執行委員会の会長、そして学園祭実行委員会の委員長を務めさせていただいたのはとても素晴らし

い経験になり、そして信頼しあえる最高の仲間たちがずっと近くで支えてくれました。これまで大変お世話になりました。

今後の学生会執行委員会、学園祭実行委員会は後輩たちが頼もしく頑張ってくれると思います。

今後の創縁祭も後輩たちが全力を尽くして開催していきますので、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

サークル紹介

吹奏楽サークル

国文学科2年　藤井晃太郎

私たち吹奏楽サークルは、今年度に設立したばかりの非公認サークルです。主な活動として、週に一回程度の練習と、九段祭ＰＯＰ・創縁祭の二回の演奏会を目標に据えています。

楽器の演奏はもちろん楽しいですが、この大学であったり、新設サークルであったりが故の大変さもあります。例えば、楽器を収納する倉庫と練習場所とが離れていて、九段下の街中を楽器片手に歩いたり、そもそも楽器が壊れていたり…。

そうとは言っても、大変なことばかりではありません。先日の創縁祭では二日に渡って、はじめての演奏会を行ったのですが、3号館の上層階という分かりづらい場所でありながら、たくさんのお客様に恵まれ、特に最後の回では準備した座席を使い切り、立ち見の方が教室を埋め尽くすほどでした。

音楽とはただ楽器を演奏するだけでなく、演奏でお客様を喜ばせたり感動させたりし、そのレスポンスを受け取ることで我々も本当の醍醐味を得られるものだと思っています。

幸いにも対面で演奏する機会が徐々に増えてきました。これをお読みの皆様にも演奏をお届けする日を部員一同楽しみにしております。

声演部

国文学科2年　松尾優沙

皆さん、こんにちは。

二松學舍大学非公認サークルの『声演部』です。現在は週に2回、木曜日と金曜日に活動を行っています。

『声演部』はその名の通り、声で演じるサークルです。いわゆる「声優」のような活動をしている、と言えば分かりやすいでしょうか。『声演部』は役者だけでなく、自身で台本の執筆、音声データの録音や編集も行っています。

製作した「ボイスドラマ」の表紙

日々の活動では主に台本の読み合いをしており、「新入生歓迎会」や「創縁祭」では、「ボイスドラマ」を製作し配布を行うほか、「創縁祭」では「リーディングライブ」も行っています。もちろんこれらの活動で使用する台本は全て、過去の先輩方を含め『声演部』の面々が執筆しています。「ボイスドラマ」も収録から、効果音を付けるといった編集、内容に合わせたリーフレットの作成まで、全てサークルのメンバーで行っており、それぞれの力が活かせるサークルです。

昨年度はコロナ禍で対面の活動はほぼ出来ませんでしたが、今年度は対面での活動を行うことが出来ました。

来年度も「リーディングライブ」等で皆さんにお会い出来ることを祈りつつ、日々の活動を楽しく！　行っています。

新連載

吾輩、推し言葉 ②

いかなるときも志高く

今回は、この三島中洲先生の「磯濱望洋樓」の漢詩をご紹介し致します。

「磯濱望洋樓」書幅並びに詩碑

〈釈文〉

夜登百尺海灣樓　夜登る　百尺海湾の楼
極目何邊是米州　極目何れの辺か是れ米州
慨然忽發遠征志　慨然として忽ち発す　遠征の志
月白東洋萬里秋　月は白し　東洋万里の秋

磯濱望洋樓　中洲学人毅

「夜百尺もある海辺の楼閣に上がって、どの辺がアメリカかと目を凝らして見る。そうしているうちに、アメリカへ遠征したいという気概が沸いてきた。折りしも月は白く照る東洋万里の秋である。」

（『三島中洲詩全釈』石川忠久編より）

中洲先生が二松学舎を創設される4年前の明治6年の作で、新治裁判所長として土浦に赴任されていた時、休暇を利用して長子の桂氏と同郷の長谷経国を伴って、霞ケ浦から水戸まで旅をされ、その途中の大洗に宿泊した際に詠まれたものです。

時を遡ること5年、中洲先生が仕えていた備中松山藩は鳥羽伏見の戦いから一週間程で備前岡山藩の征討を受け、先生は家老の大石隼雄と共に交渉にあたり、松山城を明け渡しました。その後も尽力され、藩は高梁藩として復興したところで、先生は致仕を願い出て、家督を長子の桂氏に譲り、姓を上田に改め、中洲と号しました。人望があり、教養高き人物を新政府も放ってはおきません。しばらくして徴命があり、先生は明治5年9月に司法省に出仕します。三島姓に復し、三島中洲として表舞台へと登場します。その後の活躍は皆さんご存じのとおりです。

『二松詩文』第18号に掲載の小神野三男四氏の「三島中洲先生「磯濱望洋樓詩碑」建碑由来」に、中洲先生と二松学舎、そして卒業生との目には見えない強い絆、縁を垣間見ることができます。二松学舎の同窓会が発起して、昭和8年に中洲先生の胸像を校庭に建立します（現在、九段1号館1階に設置されています）。余剰金が出たため、「磯濱望洋樓」の詩碑を大洗に建てる計画が持ち上がり、山田準学長・那智左傳教授等学校関係者が、大洗の魚來庵を訪れます。しかしながら、書幅が保管されていなかったため、先生の筆跡を集字して作ることにしようとした矢先、山田学長の知人が書幅の真偽鑑定に訪れられ、その書幅を鑑定したところ、今まさに求めていた書幅だったとのことです。関係者一同は、驚喜されたことでしょう。将に縁です。その書幅を基に詩碑が作製され、昭和9年5月に大洗の磯前神社近くに建立され、現在に至っています。

この漢詩の特に転句の「慨然忽發遠征志」は、遠く海原の先にあるアメリカを自身の目で確かめたいとの思いは計り知れないものがあります。そして知己の吉田松陰に思いを馳せていたかもしれません。新しい時代を迎え、これからの展開が期待される力漲る言葉です。この詩を読むと力が湧いてくるのは、私だけでしょうか。

15年前の初秋、本学職員の部課長宿泊研修で大洗の魚來庵を訪れる機会があり、その際に中洲学人毅「磯濱望洋樓」詩碑を拝し、その夜、中洲先生がこの漢詩を詠まれた同じ浜に立ち、太平洋を望んだことがあります。

その夜は、満天の星空でした。

常任幹事　髙柳幸雄（49文）

現代学生気質

幹事　中原敬二（62文）

左図は学部生全員の出身地域を示したものです。小規模大学ながら、滋賀県と長崎県以外の全都道府県から来ています。昭和の時代は多くの学生が故郷で教員になるために全国から教職を目指して来ていたと聞いています。

現在は多様性の時代、学びの形態も2学部6学科に増え、一定数の教員希望者はもちろんですが、様々な学びを求めて学生達は集まっています。そんな現代の学生の気質について、あくまで私見です。文学部の学生は昔から変わらず真面目でコツコツやるアカデミックタイプ。国際政治経済学部の学生は社会科学系らしく実利を追うタイプ。文学部でも都市文化デザイン学科は社会科学系に近いと感じます。

昔と変わったと思う点は、主張できる学生が増えたこと。高校までの学びでコミュニケーション能力が重要視され、大学でもアクティブラーニング型の授業が増えたためだと思いますが、自分の意見をしっかり言える学生が増えました。

その反面、（これは我々にも言えますが）IT環境が発達し、時間や手間を省くことに慣れているせいか、簡単なこともメールで質問してくることが多く、対応に苦慮しています。多くの企業がAIによるチャットボットを採用しているのも理解できます。

ここ数年はコロナ禍により、クラブやサークル等学生活動が制限されたことは非常に残念でした。影響は大きく、吹奏楽団や柔道部が廃部になっています。そのような中でも約30％の学生がクラブサークル活動に所属し頑張っていますし、サークルを作りたいという申し出もあるようです。

二松らしさを残しつつ時代に応じて変化していくのが、私学の独自性として大切なのだと思います。石川忠久先生の「不易流行の変遷」の話を思い出します。

2021年度学生数

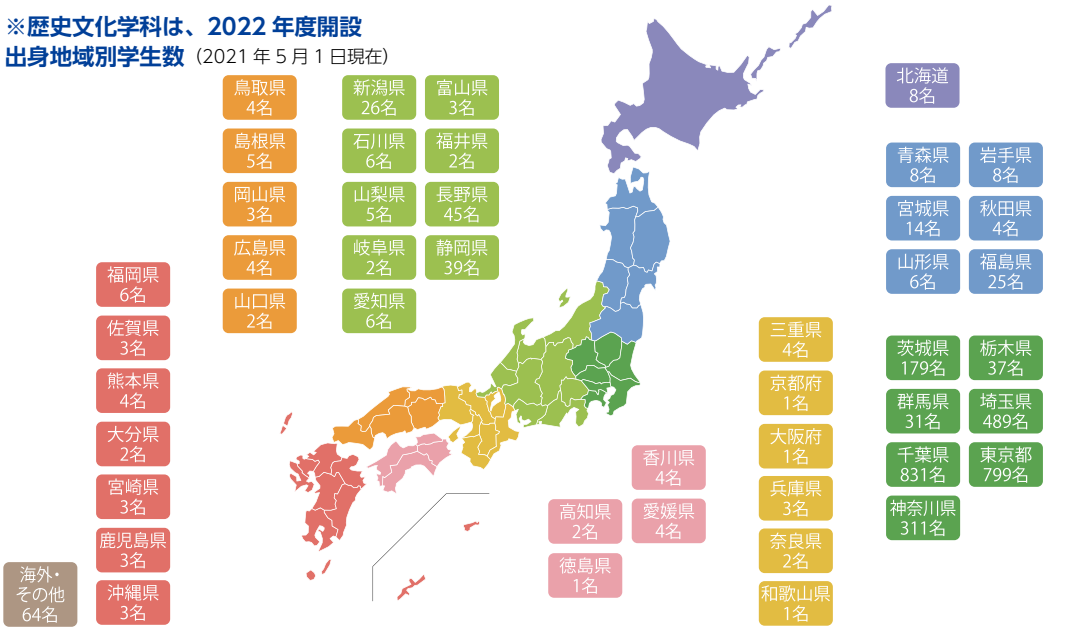
学部・学科別学生数（2021年5月1日現在）

	学生数	男	女
文学部	1,982名	790名	1,192名
国文学科	1,323名	525名	798名
中国文学科	438名	157名	281名
都市文化デザイン学科	221名	108名	113名

	学生数	男	女
国際政治経済学部	1,031名	770名	261名
国際政治経済学科	693名	524名	169名
国際経営学科	338名	246名	92名
合　計	3,013名	1,560名	1,453名

※歴史文化学科は、2022年度開設

出身地域別学生数（2021年5月1日現在）



寄付者芳名

令和4年2月1日から令和5年1月末日までにご寄付いただいた方のご芳名を掲載します。（敬称略）

たくさんの方のご協力に心より感謝し、厚くお礼申し上げます。

（一口千円）

二十口

米山　善澄　52文

十口

神津賢一郎　27文
田丸　勉　39文
金井　康　41文
髙橋早智子　44文
池田　紀実　49文
長島　優香　54文
廣田　康男　54文
早野健太郎　59文
中野　彰子　18政修

五口

積田　辰也　43文
小野　一弥　44文
平戸　有道　49文
伊藤　肇　59文
今村　桂　59文
合田由紀子　59文
川俣　茂　63文
山口　直美　63文
網野　将美　64文
豊田　力也　69文

三口

江村　春彦　57文
櫻井真智子　77文
佐藤　元希　79文

一口

日比野利江　54文
成沢　孝子　59文
金子　幸代　69文
小熊　直人　72文

祝　附属高等学校野球部 4季連続甲子園出場

令和5年1月27日（金）、附属高等学校野球部は、この春の第95回選抜高等学校野球大会に東京・関東から7校選出枠のうちの1校に選ばれました。一昨年の夏から4季連続での甲子園出場となりました。春の選抜は通算7回目の出場です。

2月16日（木）に、廣田克己会長が附属高等学校を訪問し、鵜飼敦之校長に支援金30万円が贈呈されました。

甲子園での健闘を祈ります。

事務局だより

令和4年度常任幹事会

（第4回）11月28日（土）

主な議題

1　令和4年度予算の執行状況
2　卒業記念品について
3　ホームカミングデー
4　各部会関係、諸報告

（第5回）1月28日（土）

主な議題

1　松苓会諸手当支給規程（案）
2　各部会関係、諸報告
・ホームカミングデー
・91期同期会結成
・会報69号。HPリニューアル

役員候補者選考委員会設置

今期役員の任期が今年度末で満了することに伴う後任役員（会長・監事）候補者を選考する委員会が設置され、第1回委員会が令和4年10月1日に開催されました。委員会構成員は、次のとおり。

○総会選出委員（関東地区支部長から3名）
髙柳　薫群馬県支部長
河野千津子千葉県支部長
平野光治神奈川県支部長

○幹事会選出委員（地区幹事2名、地区幹事以外1名）
坂井福作幹事（中部・新潟県）
武内昭徳幹事（近畿・兵庫県）
小町邦明幹事（地区幹事以外）

○常任幹事会選出委員（3名）
金井　康常任幹事
佐藤　修常任幹事
髙柳幸雄常任幹事

ホームカミングデー

第18回となる2022年度ホームカミングデーは、昨年、一昨年度と同様、新型コロナウイルス感染症防止の観点から卒業生を大学に招いての開催は中止し、Web（本学のホームページ内）に特設ページを開設して開催しました。特設ページでは、江藤茂博学長、廣田克己松苓会長の挨拶のほか、今年度は、「冬の特別企画〝私の地元〟Web写真展」（卒業生の作品）を掲載。会期は令和5年3月1日から。

松苓会HPのリニューアル

懸案だった松苓会HPがリニューアルされ、令和4年12月から公開。今後は掲載情報を増やしていきます。

松苓会HPは、大学HPトップ面の「卒業生の方」をクリックして入ってください。

訃報

山極　晃氏　客員教授
令和4年9月12日逝去
享年93

溝口　貞彦氏　名誉教授
令和4年12月26日逝去
享年84

ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りいたします。

表紙

本校九段校舎は現在、5号館まであります。各館の外観をお見せします。大学界隈は、講義や会議の時間が近づくと、移動する学生、教職員の姿を多く見かけ、お決まりの「二松の風景」になりつつあります。

お近くにお越しの折には、母校校舎見学もお勧めします。

リニューアルされました！　二松學舎松苓会ホームページ
【大学HP→卒業生の方→二松松苓会HP】本誌バックナンバーも閲覧できます。

編集後記

創立145周年記念の69号をお届けします。91期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。OBOGとして、ようこそ松苓会へ。ともに活動できる喜び溢れ、本会も勢いづいています。

前号からの新連載「松苓会支部長だより」では、今号も心のこもった原稿をお寄せいただき感謝しています。

次号は近畿編。支部長の皆さま、よろしくお願いします。

松苓会では皆さまの知恵や技能を提供いただく「人材バンク」登録募集、寄付金のお願いも常時行なっています。リニューアルされたホームページからアクセスください。

二松學舎松苓会報 No.69

創　刊　昭和62年12月1日
発　行　令和5年3月10日
編　集　二松學舎松苓会
住　所　〒102-8336
東京都千代田区三番町6-16
電　話　03-3261-7408　FAX　03-3261-8914
振替口座　00180-5-160343（郵便局払込取扱票）
印　刷　㈱サンセイ

二松學舎大学（松苓会）
ホームページ　www.nishogakusha-u.ac.jp
松苓会 E-mail　shourei@nishogakusha-u.ac.jp